

乳幼児のわらべうた遊びについての一考察

渡邊優香

(植草学園大学 発達教育学部 発達支援教育学科 4年)

1. 問題意識

筆者が保育所に通っていた頃は、日常的に友人とわらべうた遊びを楽しんでいた。近年では戸外に出て子ども達同士で遊ぶ機会が減少しているとされ、わらべうたで遊ぶことも少なくなっているようだ。しかし、保育実習に行った際に子どもたちにわらべうた遊びを提案すると、楽しそうに繰り返し遊んでいた。

幼稚園教育要領等においても、領域「環境」の「3 内容の取り扱い」において、「わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり」することが示され、わらべうた遊びを保育に取り入れることが求められている。

実習で幼児がわらべうた遊びを好む様子を経験し、わらべうたの何が子どもを引きつけているのか、また、わらべうた遊びを保育に取り入れることで子どもの育ちを豊かにすることができるのではないかと考えた。

2. 目的と方法

そこで、わらべうたの特徴や、保育に取り入れる際に期待できる効果について文献を用いて調査し、実践する際の留意点を考察する。

なお、本論においては「わらべうた」の定義を安藤(2017)に依拠し、「日本の伝統文化としての歌を伴う伝承遊びであり、子どもの日常生活の遊びの中で創造、継承されるもの。常に子どもの創造性によって創り変えられていくもの。」とする。

3. わらべうたの特徴と保育における効果

(1) 日本の伝統的な音感覚の伝承

わらべうたの音階について木村(2013)は、「わらべうたのほとんどは半音のない5音階で成り立っています。」として次のように述べている。([]内は筆者による加筆である。なお、木村は(ド)より低い音を“;”を付して表している。また、具体的な曲名については〈 〉を用いて示す。)

・2音構造(ド・レ) [「あそぼ、いれて」のような自然発生的な唱えうた]

・3音構造(ド・レ・ミ)、(ラ、ド・レ) [〈なべなべそこぬけ〉や〈はないちもんめ〉など]

・4音構造(ラ、ド・レ・ミ) [〈かごめかごめ〉や〈あんたがたどこさ〉など]

上記の3構造がほとんどであり、音の数が少なく子どもが無理をせずに出せる音域である。

上記のように、わらべうたは西洋の音階(ドレミファソラシド)とは異なる日本の伝統的な音構造からなっている。また、半音を含まないことに加え音域が狭いため、声帯が未発達な幼児でも無理なく、楽しみながら歌えるということがわかった。

わらべうたのリズムについて大畑(2000)は「日本的なリズムは、餅つきや拍手のように、弾みのないビートである。」として、「小さな子どもが首を前後に振りながら歌をうたうとき、日本の子どもの場合は1拍目は前に倒し2拍目に元に戻す。イギリスの子どもは、1拍の間に前に倒して元に戻す。これを、前者は弾まない質のリズム感、後者は弾む質のリズム感という。」と述べている。さらに、「日本音楽の殆どは〔略〕日本語のリズムの影響を受けて成立している」と述べている。「弾まない質のリズム感」はわらべうたのリズムにも反映されていると考えられる。

このように、わらべうたは日本の伝統的な音構造とリズム感からなっており、わらべうたで遊ぶことにより、日本の伝統的な音感覚が伝承されうると考える。

(2) わらべうたで育む様々な力

①「声」を聴き合い能動的に音楽する

西山(2001)は「遊びに音楽がつくことによって、知らず知らずのうちに、能動的に音楽することを学ぶのである。わらべうたにおいては、自分の声も相手の声もよく聞かなければ歌えないし、遊べないのである。」と指摘する。また、羽仁(2001)は「楽器は子どもの創造性の芽をつぶしてしまいます」として「わらべう

たは楽器を使わないというのもとても重要な点」だと述べている。子どもの音楽活動においては、怒鳴り声ではなく、周りの声を意識しながら歌うことを大切にしたい。幼児期になると、自分の声量や伴奏などの周囲の音量もわかってきて、他児の声も意識できるようになる。楽器の音が入らないことは、自分と相手の声をよく聴くことを促す。わらべうた遊びで音楽活動に大切な「聴き合う力」を育むことができ、遊びとして能動的に音楽することが可能になると期待される。

②ことばの力と想像力

わらべうたは定義にもあるように昔から伝えられてきた伝承音楽である。そのため、歌詞の中には現代では使われていないことばもたくさんあり、子どもが歌詞のすべてを理解して遊んでいるとは考えにくい。しかし羽仁(2001)は、「どのわらべうたにも、『何なんだろう、何なんだろう?』と思うことで、想像力が豊かになっていきます。」と、子どもが歌詞に出てくる単語に疑問を持ち、考えることで子どもの想像力が育まれると指摘している。また近藤(2001)は、「わらべうたには、言葉の持つ『イメージ』を再現する力があります。例えば、『ひよこ』のうたを歌うときには、ひよこは『小さく』、『ひよわで』、『かわいらしい』ものですから怒鳴るような歌い方はできません。」と、わらべうたは子どもが想像力を活用して表現することができるとしている。わらべうたによってことばの意味を想像し、イメージ豊かに表現する力を養っていけるとわかった。

③コミュニケーション力と社会性

わらべうたには〈はないちもんめ〉や〈かごめかごめ〉等ルールを理解し、それを守り、友達や保育者等と共に遊ぶものが多い。渡辺(2014)は「他の子ども達と楽しく遊ぶ体験が他者とのコミュニケーションの基本をつくる」と、わらべうたで幼児のコミュニケーション能力の土台をつくることができるとしている。また、『わらべうた わたしたちの音楽—保育園・幼稚園の実践』(2008)は「仲間と協調するということが社会性につながっていきます。」と述べている。つまり、ルールのあるわらべうたで遊ぶことは社会で生きていくために必要な力を身につけることにも繋がる。

4. 実施する際の留意点

わらべうた遊びを保育に取り入れる際の留意点について木村(2013)に依拠して以下のようにまとめた。

- ・年齢に合った選曲をする…乳児には、発達に必要な粗大・微細運動や追視などを考慮して選ぶとよい。
- ・子ども個人の発達を促せるような選曲をする…具体的に発達を促したいことがある場合には、それに合った刺激のあるうたで繰り返し遊ぶとよい。
- ・遊びの中で一人ひとりの発達をよくみる…子どもの発達をよく観察しながら選曲することが大切である。
- ・具体的なことばで課題を出す…「よく聴いてごらん」、「隣の人の頭を見て歩こう」など、子どもが理解しやすいように具体的なことばで指示を出す。

上記は、子どもへの音楽指導全体に言える留意点であろう。わらべうた遊びを実施する際の留意点が普遍的になるのは、わらべうた遊びが子どもの成長に本質的な関わりを持つためだと考える。わらべうた遊びは「常に子どもの創造性によって創り変えられていく」。子どもの自由な姿をありのままに認めることが最も大切なことだと筆者は考える。

5. 今後の課題

インクルーシブ保育にわらべうたを取り入れる際の留意点を今後の課題に設定する。他者の声を聴くことが大切なわらべうたで、聴覚障害児が楽しく遊ぶための配慮点や、落ち着きのない子や自閉的な子どもがわらべうたで他者と関わり合うにはどのような工夫が必要なのかを調査し、考察する。

引用・参考文献

- 安藤江里(2017)「伝承遊びとしてのわらべうたを再経験することの初等教員養成における有用性—幼少接続の視点から—」、『教育総合研究』創刊号、松本大学、p.2
- 大畑耕一(2000)「わらべうたの考察—音階・旋法とリズムの分析を中心に—」、藤女子大学紀要第38号第2部、p.51
- 木村はるみ(2013)『すぐ覚えられるわらべうたあそび』成美堂出版、p.10、pp.12-14
- 近藤信子(2001)「わらべうたは人生の入り口」、『げ・ん・き』編集部編『生きる力を育むわらべうた わらべうたは人生の入り口』、エイデル研究所、p.44
- 西山志風(2001)「日本における幼児音楽教育を考える」、同上、p.22
- 羽仁協子(2001)「わらべうたに学ぶ」、同上、p.9
- 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』、フレーベル館、pp.17-19
- 渡辺優子(2014)「保育におけるわらべうたの教育的効果—担任アンケートとわらべうた遊びの分析を通じた考察」、新潟青陵学会誌第7巻、p.9
- ユダヤイ芸術教育研究所(2008)『わらべうた わたしたちの音楽—保育園・幼稚園の実践—』明治図書、pp.27-28